

分科会研究発表・研究協議等記録

特別支援学校

第11分科会

北海道札幌市立豊明高等養護学校



大倉山ジャンプ競技場(札幌市中央区)

研究主題

「生徒が主体的に取り組むための
学習と支援の在り方」

～円滑な社会活動を行うための知識の会得と実践力の育成～

札幌市立豊明高等養護学校

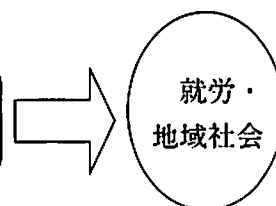
1 研究発表の概要

発表者：札幌市立豊明高等養護学校 教諭 兒玉 亜来

(1) 研究主題

生徒が主体的に取り組むための学習と支援

円滑な社会活動のために育みたい知識と実践力
体力・仲間と協力する力・問題を主体的に解決する力・余暇活動



(2) 研究仮説

○このような生徒に

- ・毎日の体力づくりを継続して取り組むことができる生徒。
- ・見通しを持てると、自主的に取り組むことができる生徒。
- ・運動が苦手な生徒。
- ・仲間との関わり方に課題がある生徒。

○このような手だてを講じると

- ・卒業後の生活をイメージできるような教材，授業展開の工夫。
- ・準備や片付けを生徒達で行う習慣づくり。
- ・達成感を感じられるような目標設定や，自己評価が視覚的に分かりやすく，意欲をもてる教材の工夫。
- ・仲間同士協力し，助け合う題材の設定

○こうなるだろう

- ・生涯に渡ってスポーツを楽しむことができる。
- ・自ら目標を持って生活することができる。
- ・問題に直面したときに，解決するための方法を考えることができる。
- ・社会生活を送るために必要な知識や，適切な人間関係を構築することができる。
- ・地域や様々な人との繋がりをもち，社会生活を送ることができる。

(3) 研究の視点

〈視点1〉生涯スポーツにつながる教材の開発・工夫

- ①生徒の実態把握，体力や技能の定着や推移の記録。
- ②卒業後を見通し，日常に取り入れやすい種目の導入。(ランニング・グラウンドゴルフ)
- ③技能差に関係なく，スポーツの楽しさを会得できるような種目の工夫。

〈視点2〉協同的，課題解決的に取り組む学習過程の構築

- ①自己理解と他者理解を通して，お互いを尊重，認め合える環境づくり。(性教育)
- ②生徒の理解力や実態に応じた学習グループ設定。(性教育)
- ③授業の準備，後片付けをグループごとに行うことにより仲間と協同する意識の醸成。
- ④自ら目標を定め，目標を達成しようという向上心の育成。

2 公開授業について

(1) 第1学年 性教育 「大人になるために」

授業者 伊藤沙保里

①本時のねらい

生徒達が誕生してからこれまでの成長を知り，体の大切さについて気づくことを目指す。

②本時の授業から

授業が開始される前には，生徒達は大変緊張しており，表情も硬く不安そうにしていた。授業では，始めに生徒の成長過程の写真を見ながら振り返り，成長の変化を知るといった活動を行った。生徒達からは事前に写真を集め，青年期→児童期→幼児期と現在から遡って振り返ることができるようにした。生徒達は写真を見せると，表情が和らぎ，「誰だろう?」「〇〇じゃない?」など会話が生まれ，写真が誰の写真かを予測しながら興味深く見ることができた。

次に生まれたときの身長・体重を発表し，赤ちゃんの人形(身長50cm，体重3kg)と約60kgの木箱を使って実際に重さや大きさを実感する活動をした。50cmとはどのくらいの長さか想像して手で表して見るように促すと，手を大きく広げて「手では表せないくらい」と言っていたり，「机の長さくらい」と答えたりしていた。また，実際に赤ちゃんの人形を抱くときは，「想像していたよりも重い」と答えている生徒が多く，自分が生まれた時の体重を実感することができていた。約60kg(高校1年生男子の平均体重)の木箱は想像以上に重かったようで引っ張ると動かなかったり，必死に動かしている生徒が多かった。そのような活動を通して，生徒は生まれた時と現在の自分の比較をすることができ，ここまで成長してきた自分の体について実感することができていた。

最後に体の成長と結びつけて，これまで関わってきた多くの人たちに感謝し，自分の存在を認め，体を大切にしていけることの大切さを説明した。



生徒達は、最初は緊張していたものの、徐々にいつもの表情になり、意欲的に発言したり、活動にも参加することができた。

③考察

- ・写真の利用や人形を使った模擬体験など活動的な内容を取り入れたことによって、生徒達が意欲的に授業に参加することができた。
- ・基本的な体の成長の変化だけではなく、生まれた時の身長・体重の違い、成長の個人差などに触れながら授業を行うことができればよかった。
- ・体の成長から「自分の体の大切さ」につなげる流れがスムーズにできなかった。多くの人たちの支えがあってここまで成長してきたこと、自分の体を知ることで体の大切さに気づくことなどをもう少し具体的に提示して伝えることが必要だと感じた。



(2) 第2学年 球技 「グラウンド・ゴルフ (室内)」

授業者 小原 要

①本時のねらい

- ・ルール、マナーを守ってプレーすることができるようにする。【思考・判断】
- ・コース作りや後片付けなどグループで協力して行うことができるようにする。【態度】

②本時の授業から

a・準備運動からコース作成

3分間それぞれのジョグのペースで走ることで心拍数を高め、歩行を挟んで呼吸を落ち着かせてからストレッチへとつなげている。ストレッチは14種類を行い全身を伸ばしている。種目に応じてさらに種類を増やす場合もある。以前はすべて笛の合図で生徒を動かしていたが、年度途中から音楽を使用してランニング、ストレッチまでの流れをつくった。ランニング時はアップテンポ、歩行・ストレッチ時にはスローテンポの曲を使用している。



b・用具配布から課題確認

課題確認は個人目標の確認、他者評価の手順、安全に対する配慮、プレー中の約束、基本動作の確認をした。内容が多すぎて生徒の理解が充分ではなかった。

c・ラウンド中

多数の参観者がいることによりスコアは劇的に向上した。ホールイン・ワンは通常授業中3回程度だが、今回は12回という結果であった。緊張感から集中力が向上した結果だと思うが、レクという観点からすると和気あいあいとした日常のモードには欠けていた。どちらの要素をどれくらいの按分で授業を組み立てていくかが課題となる。



d・評価から終了まで

スコアボード記入に時間を要し、評価からの終了までの流れが駆け足になってしまった。

③考察

a・技術向上場面の不足

ラウンド終了後の時間にバラツキがあるので、練習ラウンド等の準備があればさらに技術の向上が望めた。

b・課題解決場面の援助

個々の能力差は事前に把握しており、それを助け合いでカバーさせることを意図したが、もう少し時間が必要だった。助け合いでカバーさせる部分と事前にこちらが準備しておく部分との区分けが明快ではなかった。



c・準備運動における音楽使用の有効性

以前はやらされている準備運動という側面があったが、曲をかけることにより楽しく体を動かすという方向へ変化したように思う。

d・偏見のない集団へ

協働体制を構築することで、優越感や劣等感に起因する集団としてのごちなさ、助け合いの気持ちへ変容していった。

3 研究協議について

(1) 研究について

公開授業終了し昼食・アトラクション（豊明太鼓）の後、来賓として(財)日本学校体育研究連合会常務理事岡出美則氏、北海道教育大学教授安井友康氏をお迎えし、一般参加者・実行委員、本校教職員が集合し研究協議会が下記の通り行われました。

・研究発表に対する質問・意見

体力づくりのリズム体操の時、「列を整える」ということ「走法の指導」についての質問があった。これに対し横列はポイントが有りそれに従うが、縦列は安全を自ら判断し互い違いになるよう指導していると返答。走法等については特に扱ってはいないことを回答。さらに、助言者：安井（北海道教育大学教授）より、何を求めるのかによるが、あまり「整列をきれいに」と気にすると発達に障害のある子の場合、それに目がいってしまい本当の面白さが減ってしまうことがある。授業者の考え、授業の組み立てによる。と助言があった。また、発達障害などにより授業にのれない子の対応は、少しずつ目標を工夫して「こんなやり方もあるよ」という対応をしていると説明をする。

(2) 公開授業（性の指導）に対する質問・意見

・性の学習については、各学校で戸惑いが多く職員間の確認を（世情が揺れる中で）どうとっているのか？保護者の理解は？等、大変興味を持って質問が寄せられた。これに対し、長い年数やっており職員間で反発はないこと、グループ別の指導記録、教材を保管し、積み上げ、教職員間で連携を取っていると回答。また、保護者へは生活帳を通し伝え連携が図られていることが説明された。

・参加者からの実践や取り組みの紹介

大変難しい課題があり苦慮している。対応として「ロールプレイ」が有効ではないかと考えた。しかし、実際には特別支援学校ではなかなか難しいこともある。

助言：岡出美則氏（日本学校体育研究連合会理事）

- ・学校の授業を進める上で、教員の合意だけではダメ。保護者の合意も必要。子どもが納得し、「授業が面白かった」となると保護者も納得すると「こうしましょう！」と言える。ロールプレイは、実施に近いシチュエーションを上手につくれるかどうかで効果が全然違う。再現性の高い実践の積み重ねが大切。他の先生も「これは使えるぞ！」となるとよい。性の指導を長くやっている学校には財産がある。「こういうふうにはできるんじゃないか!？」とリーダーシップを取るのは管理職の役割と指導助言を頂いた。

この他、積極的な意見や考えが述べられた。性の指導は、難しい問題も多いが、相手との適切な関わりや自分の存在意義を知ってもらうということが今後の課題であると一定の方向でまとまる。

(3) 公開授業（グラウンドゴルフ）に対する質問・意見

- ・グラウンドゴルフの授業を展開する中で、地域性や今後の発展、学校卒業後の一般化を考えて、将来を見据えた授業や夢を実現する効果的な方法のことに話題が向いた。北海道は地域性、季節の特色が出しやすい。また、授業ではコース設定も生徒が考えることで、空間認識の力もつき、様々なメリットがある。冬に雪の上でやるのも楽しめる。冬期間のレクとして楽しめる。ただし残念なことに、卒業した途端に肥満になる子もいる。本校にはトエピラ会という卒業生の会があり、そのような活動の機会を作りスポーツに触れる機会を少しでも確保したいと考えている。

4 指導講評 安井友康教授

- ・性の問題は難しいが、難しいと言っている場合ではない。性の被害・加害が多く、自分ではわからなくて犯罪になってしまう場合もある。変化の多い日本の社会の中で、地域でいかに自立した生活ができるか。その柱は、「人を好きになる」「自分を大切にする」という気持ちが生きる力となる。性教育をあまり狭く考えず、自分や人を大切に思うという広い考えを持ちたい。豊明では先生方がコンセンサスを持ってモデルになる取り組みをしていて、個別の支援の積み重ねは財産である。これは全国に発信すべき有意義な取り組みである。自分が大きくなったのは、自分だけの力じゃないということに気づくように今後の取り組みに期待したい。
- ・体育のグラウンドゴルフについては、生涯スポーツという中で活動量の問題が出てくる。活動量が少ないことをどう担保するか。これを指摘されるとつらいと思うが、朝の体力づくりで一日の活動量は充分やっている。学習指導要領の総則でも「学校教育全体で取り組む」とあるので問題としては解決できている。体育では体の使い方、バランス、コーディネーションも大事。発達障害のある子は、「速く動かす」ことに注目し「上手に動かせ」なくて、いじめや多くの問題にぶつかる。時間に追われずにじっくりと正確なパフォーマンスをすることがグラウンドゴルフの中にあった。鈴を使ってカップインの結果もわかる。生徒はしっかり確認したいのに「はやくやれ」「がんばれ」ではいけない。今日の授業中、準備、後片付けでは、いろいろな要素が入っていて投げかけるものが多い授業だった。インクルージョンの中で、今後の特別支援学校の果たす役割は、地域の学校、地域社会にこの財産をどれだけひろげられるか。素人が見たら、ふつうに遊んでいるように見えても、いろいろな要素があって専門家・プロとして取り組んでいるんだという発信を

期待したい。

5 成果と課題

(1) 成果

〈研究発表〉

全国的に比較すると基本的な体力に劣る北海道の実態を踏まえ、本校における運動能力・体力の実態を改めて確認すると共に、その原因と対策を検討することができた。冬季における運動不足や発達障害などにより運動の機会が少ないこと等が原因の一つと考えられる。このことに対し、基本的な生活を築くための体力づくりを行うことは重要なこととして本校では毎朝体力づくりを行ってきた。意欲を保つため季節や雨天時などでいくつかの種目を換えて行い、結果が理解納得できるグラフ化などを行うことで体力の向上に向けた一定の成果がみられた。

〈性の指導〉

性の指導については様々な見方や考え方があり、教育現場においても未だにタブー視する実態もみられる。本校においては、以前より計画的に指導者一人一人の共通理解のもと行われている。今回、参加された方々の話では、性的な事案に対応ができていない実態や校内の指導体制が整っていないなど、今回の公開にはとても興味を持って参加頂けたことが伺える。助言者の安井教授のご指導にもあるとおり「被害者とならない」だけではなく「加害者にならない」ことも大切。さらに、加害者になっても加害者の意識がないこともあり、深刻な問題として扱うべきとのことであった。情報化の時代にあって、間違った情報によりトラブルを防ぐためにも役立つ公開授業であったと思われる。

〈球技：グラウンドゴルフ〉

大会主題である「未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実」を念頭に公開されたグラウンドゴルフの学習であった。障害を持ち運動に接することが不足しがちな生徒に対し、北海道発祥のレクリエーションスポーツとしてグラウンドゴルフを体験することは卒業後の生活にも大いに役立つことが考えられる。地域性を生かし、リラックスして楽しみつつ、目標や結果がはっきりとして取り組みやすい。また、今回の学習では、コースを生徒自ら協働して作ることや学習を進めるなど、卒業後の社会生活で必要となるコミュニケーションや協力・他者への配慮、更には自分自身の心身のコントロールといった学習も知らず知らずのうちに行われていることも見逃せない。楽しみながら未来へつながる学習として役立てられる公開授業となった。

(2) 課題

特別支援学校高等部として、卒業後は社会の中で生活するための多くの事を身につけなければならない本校の生徒にあって、全ての学習において課題が多くある。より効果的に連携を持って学習を進めることはとても重要なことと思われる。今回、多くの意見を聞き、同じように困っていること、より良い意見や考え方などの交換が行われたことを生かせる事が大切。特に、卒業後の実際の生徒の生活を配慮し、どのような力や知識が必要か、またどのように学んだことを実生活の中で実践することができるか、生徒一人一人がそれを生かす自覚を育むことが課題と考えられる。